

帝国主義の侵略反革命を粉砕し全世界の帝国主義者打倒せよ！　スター・ラン革命との國際空氣船争を組織世界プロレタリア革命一世界ノ日本政府王族を相殺する世界一ノ党を國際階級斗争の最前線に進むよ

烽火

共產主義者同盟（全國委員會）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06)371-3706

○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

全国労政結成3周年にあたり

社共の秘密法反対運動批判

沖縄闘争学習資料(第2回) P6~7
(古典学習)②空想から科学へ P8

1986年
9月30日
第374号
編集発行人 高木一
一部 200円

全国労政結成3周年にあたり
----- P2~3

社共の秘密法反対運動批判
----- P4~5

沖縄闘争学習資料(第2回)----- P6~7

(古典学習)②空想から科学へ----- P8

にしかけてきていた。分割・民営化法案は国鉄労働者十万人の首をとばし、国鉄労働運動の屋台骨をへし折るうとする法案であり、国鉄解体によって独占資本がぼう大な利潤を手に入れることが可能にする法案である。日本帝国主義は国鉄分割・民営化を「戦後政治の総決算」、すなわち本格的な侵略反革命戦争とファシズム準備のための柱のひとつに位置づけ、労働者階級の全面屈服をひきだそうとしている。国労働者にかけられている攻撃は、全労働者階級人

国鉄分割・「 法案の成立

国鉄分割・民営化闘争 法案の成立を阻止せよ

卷之三

九月二十五日、国鉄分割・民営化八法案の審議が衆院ではじまつた。中曾根は今臨時国会の冒頭「国鉄の改革は当面の最大かつ緊急の課題」と所信表明し、国鉄解体強行の強い決意をしめした。

日本帝国主義は十一月上旬法案成立、八七年四月分割・民営化実現にむけて、かつてない規模の攻撃を労働者階級人民

民にかけられた攻撃である。今日、国鉄労働者に強いられている現実は、明日はすべての労働者人民の現実になるのだ。この攻撃を黙して許すならば、わが国の労働者階級の未来はない。

しかし、たたかいはいまだ立ち遅れている。鉄労との組織統一の道を選択し、労資一体化と国労つぶ

もうとする法案であり、国鉄解体によって独占資本がぼう大な利潤を手に入れることが可能にする法案である。日本帝国主義は国鉄分割・民営化を「戦後政治の総決算」、すなわち本格的な侵略反革命戦争とファシズム準備のための柱のひとつに位置づけ、労働者階級の全面屈服をひきだそうとしている。国労働者にかけられている攻撃は、全労働者階級人

そうとするなど、国鉄労働者をとりまく情勢は厳しい。将来への不安、当局によるあからさまな不当労働行為、鉄労、動労など御用労組の切り崩しのなかで、あくまでも原則と信念を曲げず、たたかいぬいでいる戦闘的国鉄労働者を孤立させてはならない。いまこそ全国から国鉄関連法案粉碎、分割・民営化阻止の大衆的決起をつくりだそう。



現地集合二三事

9.14 三里塚

一期本格着工阻止を宣言

二期用地内の横堀現地闘争本部前でおこなわれた。中曾根の二期早期着工指示、三九四億円の予算要求など二期本格着工が煮つまり、十月四日には東峰十字路判決公判が予定されるというきびしい情勢のなかで、この日の集会はかちとられた。反対同盟五〇名を先頭に三〇〇〇名を結集した集会のなかで反対同盟は、二期工事にたいして体を張つて現地集会に三千

現地集会に三千

9・14 三里塚

一期本格着工阻止を宣言

たたかうこと、東峰重刑でっち上げ判決策動にたいして無罪をかちとるために断固たかうことを宣言し、さらなる支援を訴えた。この集会にたいし権力は、全国から一万の機動隊員を動員し、各所で検問をおこなうなどの弾圧体制を敷き、集会への妨害、いやがらせをくり返した。

九・一四集会の成功を受け、十・四東峰判決公判闘争に結集し、さらに一期阻止現地攻防戦に総決起しよう。

東峰重刑判決攻擊粉碎

全国労政 結成3周年

共産主義者同盟（全国委）が全力をあげて呼びかけてきた「武装せる革命の伝導路」の結成をもって本格的に開始された。以降三年間の労政建設の全成果をわれわれはここに明らかにし、全国の先進的労働者・学生諸君にその成果の共有と大規模な拡大とともにうつてることをうたえる。

労政建設を支えた 三つの路線的確信

全国労政の建設をもって本格的第一歩をふみだしてきた「武装せる革命の伝導路」の建設とは、次の三つの路線的確信に裏うちされた組織建設事業であった。

第一は、プロレタリア革命の歴史上のいっさいの経験が教えるように、ブルジョア国家の暴力的打倒とプロレタリア独裁の樹立を実現するためには、革命の二つの機関、赤軍とソビエトにプロレタリアートの大群を組織するという任務を、革命党がひきうけ何としても準備していかねばならないといいう確信である。

われわれのこの確信はレーニンから学んだものである。「革命軍と革命政府、これは一つのメダルの両面である。これは蜂起の成功のために、そして蜂起の成果をうちかためるために、同じように必要な二つの機関である」（一九〇五年「革命軍と革命政府」）。一九〇五年の第一次ロシア革命のさなかにレーニンはこう主張した。レーニンは軍隊内の反乱のなかに革命軍の中核の萌芽をみ、またソビエトのうちに臨時革命政府の萌芽をみいだし、この二つの機関の建設が革命の成否をきぎつていることをあきらかにしたのである。われわれの労政建設は、のちに世界革命の軍隊にまで発展する赤軍と、レーニンによって武装蜂起の機関、プロ独の機関として位置づけられたソビエトの建設を、今日の時代から當々と準備していく実践なのである。

レーニンの時代の赤軍とソビエトの建設・指導が大衆の創意と自主性に大胆に依拠していたよう、われわれの労政建設もまた、革命党建設と結合したプロレタリア階級自身の歴史的事業として前進させ、発展させつづけるべきものである。

第二は、ブンド党建設史上のこの面におけるさまざまな経験、とりわけ第一次ブンド以来の社・労研路線にたいする批判的総括からみちびきだされた確信である。

かつてわが同盟が拠点職場に反日共労働者統一戦線として組織した社研・労研は、青年労働

者の職場活動の活性化、政治意識の高揚、街頭政治闘争への決起に大きな力をおよぼしてきた。

しかし当時の党建設の脆弱さと結びついて、党は社・労研の世話役となり、その内部から解党主義者が生みだされるのを阻止しえなかつた。六〇年代末には社・労研から生まれた一群の

無数の革命の伝導路を組織していくことを、その要にしなければならないという確信である。呼びかけてきた「武装せる革命の伝導路」の建設戦は、八三年秋、全国労働者政治委員会の結成をもって本格的に開始された。以降三年間の労政建設の全成果をわれわれはここに明瞭にし、全国の先進的労働者・学生諸君にその成果の共有と大規模な拡大とともにうつてることをうたえる。

革命、武装蜂起が勝利するためには、勝利を保障する客観的条件が必要である。この点を無視するのはマルク主義ではなくプランキズムである。しかし同時に武装蜂起は党によって主体的に準備され計画されるべきものである。準備の中心はプロレタリアートの階級的組織化と党的建設である。プロレタリアートの階級意識を高め、武装をうながし、前衛党建設との結びつきを強化すること、このような活動が、階級闘争が鎮圧され、革命党が孤立を強いられるという現下のきびしい階級情勢のもとで、徹底して強められねばならない。われわれは労働組合やさまざまな大衆諸組織の内部に、党と結合した無数の革命の伝導路（労政）を建設することで、敵の階級解体攻撃とたたかってプロレタリアートを革命的階級へと形成し、革命の主体的準備をおしすすめるのである。

党と結合し革命をめざす活動家組織

以上の固い党的確信にもとづき、建設すべき労政の組織性格と任務は次のようなものとして確立してきた。

①労政はレーニン主義・中央集権非合法党建設としつかり結合する。公然たる解党主義とたかうだけでなく、階級闘争の最高の形態である党派闘争、社共との党派闘争、革命的陣営内にしおこむ現代カウツキー主義、右翼日和見主義との党派闘争をみずからに任務とする。

②労政は社会主義革命と自己の現在の任務をしっかりと結合する。資本主義の原則的批判、帝国主義批判で自己を理論的に武装し、またわが国のプロレタリア革命の路線をめぐる一方での平和ゼネスト革命路線、他方でのゲリラ・戦闘路線とたたかいきり、プロレタリアートの全国一齊武装蜂起路線をしつかりとかかげる。みずからを赤軍とソビエトへと形成していく道をめざす。

③労政は現実の階級闘争の深部へと突撃し大衆の護民官的前衛、政治的前衛としての任務をないきる。

④労政は政治警察、資本の弾圧、日和見主義者の暴力的攻撃とたたかい、自己の組織と運動を防衛・発展させることのできる戦闘組織へと自己を建設する。

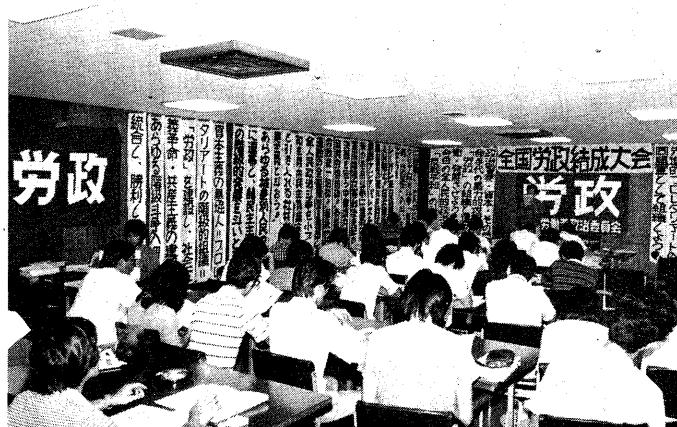
このような確認にもとづいて、全国労政結成以降、党と数多くの先進的プロレタリアートの手によって、労政建設は大きな前進をかちとつてきた。われわれは全国労政結成以来の三ヵ年を通じ、「全国のあゆる工場・学園・地域・戦

労働者政治委員会活動の到達地平と課題

あらゆる工場・学園・戦線に 武装せる革命の伝導路を！

「組合サークル主義者」たちは、武装闘争の巨
大な激動から逃亡し、前衛党建設の苦闘に正面
から敵対した。われわれはこのよき敗北の主
体的総括に立って、労政を解党主義との闘争、
前衛党建設をめぐる党派闘争を質的に内包しうる組織として建設してきた。それはかつての社
・労研がいくつもの優れた実践を残しながらも、
組合内左派反対派、組合主義的団結の枠をこえ
ることができなかつたことへのわれわれの回答
であった。

第三は、革命的激動期と次の激動期とのあい
だの長い過渡期にあるわが国の階級闘争の現状
のなかで、革命の主体的準備は党をとりかこむ



全国労政結成大会(83年9月18日)

線に武装せる革命の伝導路=労政を建設せよ!」を合言葉に、以下のような地平をゆるぎないものにしてきた。

それはまず、階級的労働組合の地域的連合と大衆的プロレタリア政治統一戦線を両翼とする階級闘争の地域陣形のただなかに、労働組合的団結の枠をみずからふみこえる革命の組織としての労政を、網の目のように張りめぐらせてきたことである。生きんがため、食わんがために労働組合に結集してくる労働者のなかから、自分一人のためではなく、自己の属する階級総体のために、自己の雇用者との闘争のみではなく、巨大な敵階級総体の打倒を任務とし、経済闘争と政治闘争とを固く結合しようとする一群の新しい先進的労働者が生みだされた。そして一群の工場労政、地域労政組織が急速に形成され、活動を開始した。共産主義者たるんとする青年労働者たちを通じて、階級的労働組合とその運動は党と結合し、将来にそなえる階級闘争の基礎構造として、生き生きとした拠点たりえてきたのである。

さらに労働貴族の支配する労働組合のただなかで、共産主義の旗を守りぬき、反共指導部の手から指導権を奪いかえすための孤星を防衛しきってきたことである。敵ブルジョアジーの階級解体攻撃の最前線での闘争において、社共はいうにおよばず新左翼諸派さえもが、敵階級との組織戦に敗北の道を歩むなかで、ブンド労働運動の伝統を革命的に継承し、革命的政治闘争の旗をかけつづけてきた電通労働者政治委員会を先頭にして、全国労政はこの任をひきうけてきた。

加えて、革命的学生運動の創建を旗印にしてプロレタリア階級闘争の一翼に先進的学生を組織し、将来のプロレタリアートたる学生をプロレタリアートの同盟軍へと変革するたたかいを、労政建設のなかに断固としてすえきったことである。わが国の階級闘争の高揚期に学生運動は

常に先駆的・戦闘的役割を果たしながら、労建設との結合に失敗してきたことの総括をかけ、まん延する右翼ノンセクト、学園主義との鮮明な分岐のうえに、学生運動の内部に党的転換——右翼ノンセクト、学園主義と急進民主主義、政治過程主義双方の呪縛から解放にむかうマルクス・レーニン主義の原則的復権の要求のなかで、この好機をプロレタリア階級闘争と前衛党建設の前進に結合させるべく、新たな努力が開始されなければならない。

プロレタリア政治 闘争の前衛として

さて、当面する日帝ブルジョアジーによる階級闘争抑圧の一時代のなかで、これら切りひらいてきた労政建設の第一歩の成果は、党の指導のもと、徹底したプロレタリア政治闘争の大規模な組織化へとうってることに発展させられた。われわれはすでに八三年秋から京都において、階級的労働組合とその運動を基礎とした大衆的政治決起の組織化という基本的事業をつづけてきた。そしてこのような階級闘争の陣形建設の前進を背景に、プロレタリア政治闘争の組織化をめぐる新しい努力が開始されてきたのである。

八五年初頭から開始されたニカラグア共産主義革命連帯運動、八六年五・四東京サミット粉碎闘争、そしていま開始しようとする国家秘密法粉碎闘争がその代表的なものである。

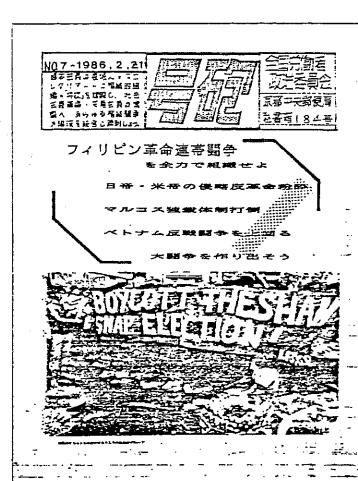
ニカラグア革命連帯闘争は、日本階級闘争の中心問題を、他国の共産主義革命への連帯戦として提起するプロレタリア政治闘争のもつとも煮つまつた質を内包する実践であった。労政はニカラグア革命の共産主義への発展が、一方に主義との原則的党派闘争を不可避免とするという現代世界の共産主義運動の現状を直視すると同時に、他方、反帝民族解放闘争のただなかからこんだ。そして大衆的連帯集会をおこない、デモを組織しきった。このたたかいを通じて、先進的労働者・学生の階級形成にとって、他国のが産主義との連帯が、プロレタリアートの運命

の国際的同一性とその解放の条件の世界性を確信させるための、何よりもの契機となることがはつきりと証明された。

八六年五・四東京サミット粉碎闘争は、社会主义テロリズムと市民主義への左右の解体のかで、小なりといえどこれを止揚するマルクス・レーニン主義をかけたプロレタリア政治闘争として、先進的労働者・学生の熱い注目と参加のなかでたたかいとられた。この闘争は東京サミットの本質を資本主義・帝国主義への原則批判の立場から暴露し、プロレタリア国際主義に立脚するたたかいとして、またプロレタリアートの武装蜂起に基準づけられた政治決起として組織され、いまだ少数ながらプロレタリア本隊と切斷された決起ではなく、プロレタリアートの政治的前衛たらんとしてたたかわれた。

そして最後に、以上のプロレタリア政治闘争上の切りひらかれた地平に、より多くの労働者・学生を組織し、反戦・反核・平和という全人民的政治要求と批判的に結合し、プロレタリア政治要求（武装蜂起・プロ独）との結合環をつくりだしていくたたかいとして、国家秘密法粉碎闘争の大胆な組織化を開始することをわれわれは提起する。詳しくは烽火前号および今号の別掲文書に譲らねばならないが、「階級闘争・弾圧・前衛党建設の孤立化と民族排外主義の組織化」をねらうという国家秘密法の階級的性格からして、プロレタリアートの政治決起を中心とした広範なたたかいを創出し、その内部に労政をして、プロレタリア政治要求をもちこんでいく政治的前衛活動をつくりだすこととは急務である。

☆ ☆ ☆



社共の秘密法反対運動に

秘の臨時国会が始まる。とともに、国家秘密法を再提出しようとする動きが強まっている。九月一八日には自民党の「スペイン防止法制定特別委員会」と「スペイン防止のための法律制定促進議員・有識者懇談会」(促進懇)が合同会議をもち、「防衛秘密に係わるスペイン行為防止法案」へと名称変更した国家秘密法の制定を急ぐことを確認した。

法反対運動が再開され始めている。しかし社共のよう、スペイから國家秘密を守る必要性を認めたうえで「民主主義と国民主権の防衛」にいっさいを收れんさせる運動によつては、國家秘密法を通した日帝の排外主義の組織化や階級闘争破壊とたたかえないばかりか、侵略反革命戦争とファンズムの準備にたいしてとりかえのつかない敗北を迎えるをえない。それでは先進的労働者・学生はどのような立場に立ち、どのようにたたかうべきなのか。この小論では社共への批判を通して、これらの点を鮮明にしていきたい。

階級闘争根絶をねらう攻撃

まず国家秘密法制定にかける日帝

まず国家秘密法制定にかける日帝のねらいを再度整理しておこう。

第一次、第二次石油危機以降の世界資本主義の危機のなかで日帝は、国際競争力を飛躍的に強化し、アジアから全世界に新植民地主義支配を拡大することによって、帝国主義的なで米帝に次ぐ経済的地位を確立した。しかしそれは七〇年代中期以降、米帝をはじめとした他の帝国主義との経済的対立を激化させ、またソ連および反帝民族解放闘争との対立を激化させてきた。

日帝はこのようななかから、将来の危機に備えて侵略反革命戦争とファシズムの準備をおしすすめました。中曾根政権のかかげる戦後政治の総決算とは、戦争とファシズムにむけてわが国の政治と経済を大きく

敗北の歴史く りかえす社共

社共はこのような国家秘密法にたいしてどのような立場から反対しているのか。

社共の誤りの第一は、スペイから
国家秘密法を防衛すること自体は必

要とする」とすることによって、核心的な点で日帝による民族排外主義の組織化を阻害してしまつた。二回報じてしまつたところから

は雇用してしまっていることはある
ブルジョアジーは「スパイ防止法

制約を受けることとなつても、それは国の安全を確保するために受忍さ

取材活動及び報道の自由も絶対無制

限のものではありません」（八三年
一一月自民党政務調査会）と主張

し、きわめて攻勢的にスペイから国を守る必要性をうちだしつづけてき

た。さらばに保進懇の江藤淳は八四年九月一八日の公開シンポジウムにおいて、「スペイン方上法は言論人の國

い。一方で、隣の言語人の目
家に対する忠誠心を国家の側から求
めようとする初めてのもの——と國家

秘密法のねらいを説明し、国家秘密法がスパイからの防衛にとどまらず現在の日本国家に忠誠をつくし、日

本国家の防衛を最優先していく思想的立場に立つことをアロレタリア人民に迫るものであることを鮮明にしている。

これにたいし社会党は「スペインにはすでにある秘密保護法でも間に合う」とのべ、日共もまた「スペイン行為などは、刑法、公務員法、自衛隊法など現行法で防止や処罰は十分可能」とのべ、スペインから国を守る必要は承認するという立場に立ってい

タリア人民を戦争への国家総動員体制に組織する道を開いていくことにある。そして国家秘密法のもう一方の性格は、「スパイから国家を守るために」という口実のもとで階級闘争と前衛党建設を破壊していくことにある。総じて階級闘争の根絶のうえに、侵略反革命戦争にむけた総動員体制を形成するという長期的ねらいにつらぬかれた危険さわまりない攻撃なのである。

必要性をいささかでも承認することは、きわめて危険なことである。そもそも日本国家を守るとはいいたい何を意味するのか。現在の日本は資源、商品販売市場、資本投下市場をめぐってアメリカや西欧諸国と激しい強盗的抗争をくりひろげ、南朝鮮をはじめ多くの国々を新植民地主義支配下におき、それらの国々のプロレタリア人民を過酷なまでに収奪・抑圧する帝国主義国である。このよ

うな日本国家を守るとは、日帝ブルジョアによる侵略反革命や新植民地主義支配を支持し、他国のプロレタリアートの犠牲のうえに、自國の安全と繁榮を求める民族排外主義にほかならない。それは、危機の時代には、自國の帝国主義が生きのびるためにの帝国主義戦争に動員され、他のプロレタリア人民との殺し合いに動員されていくことにはきつくものである。

民族排除主義とたたかえなかつたために、プロレタリアートやその政党が帝国主義戦争に積極的に加担していく歴史の教訓は数知れない。第一次大戦を前にしたヨーロッパの第二次インターに所属する社会民主黨のほとんどは、「祖国擁護」をかけさせて本国帝国主義の戦争に協力した。それは「だれでもその祖国を防衛する権利があり義務がある。眞の國際主義とは、この権利を、わが国民とたたかっている国民を含めたすべての国民の社会主義者にみとめることである」（一九一四年・当時の第一インターの指導者カウツキー）という理由で正当化された。帝国主義において自國の防衛を承認することができる、どれだけ恥すべき裏切りと帝国主義戦争への協力にいきつくのかをこれは鮮やかに示している。

(5) 1986年9月30日

現実を背景にして国家秘密法への屈服を迫ってきてる時に、スパイ問題にたいする態度をあいまいにしておくことは危険である。

大衆から孤立させることである」という思想がたたきこまれている)。社共はプロレタリア人民がみずから解放のためには、ブルジョア独裁とその國家を打倒しなければならぬといふ確信を育てあげることを、戦後一貫して阻害してきた。彼らはまたもそれをくり返そうとしている。

い。
秘密法粉碎の大衆的決起を
たたかう労働者・学生は、今秋、

国家秘密法 粉碎闘争の 前進のために

族排外主義への組織化と断固としてたたかわねばならない義務があるのである。日本という帝國主義国に生きるプロレタリア人民は、自國の防衛にいささかも協力してはならず、日帝の侵略反革命と戦争の準備に反対し、帝国主義を打倒しなければならない。

この立場は他国からのスパイにたいする態度にもつらぬかれねばならない。「日本はスペイ天国」というブルジョアジーの宣伝が、現実をきわめて誇張した表現であるのはたしかだとしても、今日の世界では米

リ亞人民が積極的に協力させられて
いたのも、日帝の中國侵略にたい
して「満蒙の利益を大衆に与えよ」
と唱える右翼社民政党があらわれた
ように、日本の労働者の生活苦から
の解放を他国への侵略と他国プロレ
タリア人民の犠牲のうえに求めよう
とする民族排外主義に、プロレタリ
ア人民のほとんどが深くとらわれて
いたことが大きな理由であった。
以上から明らかのように、プロレ
タリア人民は國家秘密法を通した民

する秘密情報収集にどどまらず、二カラグア反革命ゲリラの直接指揮などの秘密工作にまで手をのばしている。日帝もまた例外ではない。帝国主義国のスペイン行為とは、その多くの場合、「社会主義国」や反帝民族解放闘争にたいする反革命行為であり、秘密裡にすすめられる侵略反革命戦争行為である。したがってわれわれはスペインにたいする態度を、スペイ一般にたいする態度として扱つてはよらない。國家間のスペイン行為

ブル独防衛に
加担する社共

社共の誤りの第一は、国家秘密法との闘争を「民主主義と国民主権の防衛」にいつさい收れんさせ、階級闘争と革命党建設にたいする弾圧とたたかいたいえないことにある。

社共は「国家秘密法は国民の知る権利を奪い、憲法に保障された国民主権を否定する」ことを反対の主な理由にあげ、「知る権利を奪われたまま戦争に効貢されこそ憲法など、つづく

階級闘争の前進のためには、報道・出版・言論の自由などの民主主義的諸権利は、断固として防衛されねばならない。しかしそのことと「国民主権の防衛」に闘争の目標を定めることは別の問題である。いったい「国民主権」と表現しようが何と表現しようが、この日本でプロレタリア人が國家の主人公であった時がしてはならない」という。たしかに

存在しただらうか。現在にいたる日本国家は、階級闘争を鎮圧し、ブルジョアジーの独裁支配をつらぬくための道具である。警察や軍隊や監獄はブルジョア独裁支配を維持する暴力装置である（日本の警察では新任警察官に「警察は革命勢力をうちる前衛である」「警察の目標は革命を主張する革命勢力を扼めることであり、それは彼らを一船大衆から孤立させることである」という思想がここまではれている）。

しん思想がたたきこまれてい
社共はプロレタリア人民がみずから
の解放のためには、ブルジョア独裁
とその國家を打倒しなければならぬ
いという確信を育てあげることを、
戦後一貫して阻害してきた。彼らはな
まともそれをくり返そうとしている

秘密法粉碎の大衆的決起を

たたかう労働者・学生は、今秋、
国家秘密法によつて民主主義的諸権

社共の屈服を許さず、国家秘密法
紛糾闘争の最先頭に立てる！

ア政府が米帝の軍事侵攻計画を入手するためには、スパイを送りこんだな協力してはならないのである。そればかりではない。たとえばニカラグアからで、アメリカ・プロレタリアートはそれに協力する義務が生じるようになりだすために全力でたたかわねばならない。同時にできるだけ広範なプロレタリア大衆にたいして、次のような政治的・思想的確信へと大衆を接近させていくための直接的にはたらくかけを全力でになわねばならない。

第一には、ブルジョアジー・右翼勢力による民族排外主義の組織化とたたかい、全世界の反帝民族解放闘争と階級闘争に連帯し、自国帝国主義＝日帝の打倒にむけてたたかうこと。第二には、国家の防衛のためには民主主義や階級闘争の抑圧は当然であるというブルジョアジーの政治理攻勢とたたかい、ブルジョア独裁をすすめる日帝にたいして日本プロレタリア人民がとるべき態度であること。第三には、国家の防衛のためにたたかい、これを打倒しないかぎり自己の解放はありえないこと。第三には、プロレタリア共産主義革命にむけてたたかう前衛党と先進的プロレタリアートの革命の組織を、ブルジョアジーの治安強压から防衛し發展させることが、日帝の歴史的な戦争とファシズム準備に勝利組織していくことが、国家秘密法粉碎闘争を階級闘争の前進へと結びつけていくための焦点となるのである。

學習資料

沖繩87年闘争の勝利にむけて

沖縄の歴史(2)

戦後の分離支配から 第二の琉球処分=72 年「返還」まで

踏みにじられた解放の期待

分離支配

沖縄戦はぼう大な住民の生命を奪い去り、全島を文字通りの廢墟と化して終結した。からうじて生き残った人々は金網に囲われた米軍収容所生活のなかから戦後を踏みだした。やがて米軍は軍事上不必要的地域の出身者から徐々に帰郷を認めはじめたが、しかし故郷が墓地にされてしまっており、自分の土地に帰れぬままになってしまった人々も多い。米軍が日本軍を駆逐しつつ、拡大する占領地に次々と基地を建設していくからである。あらゆる産業が破壊しつくされ、家・田畠など一切が灰燼と帰してしまったなかにあって、沖縄の戦後はまさに「ゼロから」の出発」であった。



米軍政下で開校した学校
(45年7月31日)

一九四九年に朝鮮民主主義人民共和国が成立し、四九年に中国革命の勝利が不可避となるにおよんで、米帝は前進する民族解放・社会主義のたたかいを封じこめるために沖縄をアジアにおける軍事的要石としてうちかためていく方針を鮮明にさせた。五〇年、朝鮮戦争がばつ発するなかで、米帝は沖縄支配体制の本格的な整備と、恒久的基地建設を急務としたのである。

太平洋の

早くも「米海軍軍政府布告第一号」を見すえて沖縄を支配していく方針がだされ、軍政府が設立された。そして一九六四年一月には連合国総司令部（GHQ）の「若干の外郭地域を政治上行政上日本から分離する」とに関する覚え書きによって、沖縄分離支配を確定的にしたのである。そして重要なことは、この沖縄分離支配はたんに米帝の方針としてあつただけではなく、日本のブルジョアジーの意でもあったのである。こ

第一次、第二次大戦という帝国主義世界戦争は、ロシア革命を先頭に一連の社会主義革命を誕生させ、また植民地支配下の民族解放・独立の大たかいで燃えあがらせた。これらは戦後世界においてたえることなく拡大し、のみならず民族解放闘争は国際階級闘争と結びついて、直接に社会主義革命へと前進していくという地平を切りひらいていつた。

● 土地強奪

ちかためていく方針を鮮明にさせる。五〇年、朝鮮戦争がばつ発するなかで、米帝は沖縄支配体制の本格的な整備と、恒久的基地建設を急務としたのである。

五〇年十二月、米極東軍司令官マッカーサーは沖縄米軍司令官に「琉球列島米国民政府に関する指令」(スキヤップ指令)を発し、米軍政府を廃して米民政府に改称し、マッカーサー一みずから米民政府長官に就任した。そしてこの米民政府の下に住民自治政府としての琉球政府が発

（その）強化の同時に、米軍が陸海空軍行
為として占領し、以降も勝手に占拠
しつづけている基地について法的根
拠を確立する必要があった。さらには
は新たに基地とする土地の接收をも
必要とした。このために五二一年以
降、米政府は基地関係の布令・布
告を次々と発布した。

一連の布令・布告によって米軍は
それまでまったく無償で使用した軍
用地に借地料を払うこととした。し
かし、その額は一坪年間一円八銭
(当時タバコ一箱十四円)といふもの
でしかなく、今までどうりのただ

第一回

をはじめ琉球の諸島を軍事占領しつづけることを希望している。その上、領はアメリカの利益になるし日本を守ることにもなる」などと進言したことである。なお当時はすめられていて極東裁判では天皇を戦犯として断罪すべきか否かの論争のただなかであり、この「天皇メッセージ」は天皇の免責と決して無関係ではなかつた。すなわち天皇は、自己の延命のためにのみ沖縄で二〇万人の犠牲を強要したことを悔いるどころか、今度は自己の助命と引きかえに米帝の沖縄支配を積極的に追認し、沖縄人民を米軍政府のもとに売りわたしたものである。

足することになった。しかしどうや
ップ指令はあくまで「戦的価値ある
沖縄を含む琉球諸島に対する管理を
強化する計画のもとに」（総司令部
涉外局）だされたものであり、琉球
政府は「最高の権威は民政長官にあ
り、自治政府もその権威に服する」
ものでしかなく、その権利も「軍事
上の安全保証を妨げない範囲で」と
か、「占領目的に反しない限り」な
どの前提のもとでのきわめて限定的
なものであった。またその首席は米
民政府長官が米帝にとって「好まし
い人物」を任命するものであった。
このスキャップ指令でもう一つ重要
なことは、米帝の必要とする土地の
収用について詳細な指示を与えてい
ることであり、これが以降の土地接
収の基本方針となつたのである。

戦後、日本とまったく切り離された沖縄であったが、六〇年前後から政治的にも経済的にも日本との関係も生まれてくるようになった。その背景には、日本経済が完全に復興してきたこと、日米帝の安定的な同盟関係が深まっていることが

新時代
日米研究

：長期にわたって基地が保持できるし、原子兵器を貯蔵・使用する権利を「い」などとし、米民政府の政策を全面支持するプライス勧告を発表したのである。これは沖縄人民の怒りを一層かきたてた。そして「（土地闘争は）きのうきょうに起こったのはなく戦後十年間、なんとか持ちこたえてきたものが、セキを切つてしまでたのである。いわば忍従の極限にきた抵抗である」（沖縄タイムス社説）という島ぐるみの鬭争が爆発したのである。そしてこのたたかいのエネルギーが六〇年代の復帰闘争へとつなげていく。

同然でありながら「借地料を払つて
いる」と居直り、土地の占拠を正当化
しようとするものでしかなかつた。
またこれらの布令によって真和志村
銘苅部落、読谷村渡良知部落、
小禄村眞志部落、宜野湾村伊佐浜部
落、伊江村真謝・西崎部落などをあ
いついで、文字通り「銃剣とブルド
ーザー」によって住民の哀願や必死
の抵抗を押しつぶして強奪したので
ある。さうに五四年には米民政府は
軍用地買い上げとしての借地料一括
払いの方針をだしていく。

このような土地接收や基地の永久
固定化政策は、沖縄人民の大きな憤
激をよび起した。米帝はこれを何
とか慰撫しようとプライス調査団を
沖縄に送り、そして沖縄人民も「民
主主義の手本」、米会議のこの調査
団に大きな期待を寄せた。しかし調

査団はたった三日滞在ただけで、
「いかに沖縄に同情的になろうと
も、軍事的必要性が断固として優先

六〇年代に入つて新しい動きがはじまつていく。ベトナムを先頭に国際階級闘争の新たな激動が開始されるなかで、沖縄では六〇年に復帰協定が結成されて復帰闘争が大きな高揚を示はじめ、他方、米帝（ケネディ）は沖縄新政策をうちだしていく。この沖縄新政策は、米帝のベトナムなど東南アジア諸国への本格的軍事介入にそなえ、沖縄をその戦略基地とすること（核基地化、地上兵力の集中、東南アジアへの発進）を目的とし、沖縄支配の安定をはかるために、沖縄人民にたいする政治的配慮の政策（保有する必要のない行政機能の琉球政府への委譲、琉球住民を不必要に制限している諸統制の撤廃）をも含んでいた。しかし沖縄人民のたたかいはケネディ政策の制約をこえて高揚し、「自治は神話なり」（六三年、キャラウエイ高等弁務官）の発言にみられるような米帝の高圧的な支配にたいして、六二年の二・一決議（琉球立法院が国連加盟諸国あての復帰決議を全会一致であげた）、六四年の「第二の島ぐるみ闘争」と呼ばれた首席公選制要求闘争などの反米民族運動が強まつていく。米帝は沖縄の反米民族運動を根柢だやしにしようとしたが、それは

五八年の軍票（B円）からドルへ
の切りかえは「新時代」の端初であ
った。それは「全琉球は間もなくド
ル経済圏に取り込まれるとみられ
る。これは通貨の出所がどこにある
かを住民に知らしめる措置である」
（U.P.I.通信）とともに、日本から
の資本導入をも促進する措置であ
った。また政治的には、沖縄内部にい
れによる受益者層＝売弁ブルジョアジ
ーを育成する意味をもっていた。
米帝は五九年、琉球開発金融公社
を設立し、六〇年には琉球経済援助
法を制定する。日帝も五九年から沖
縄経済援助を開始し、六〇年には因
給・遺族年金の支払いもはじめる。
また日本の民間資本の進出もはじま
った。

六
卷之三

帝のベトナム介入は沖縄をいやおうなく巻きこんでいった。「南ベトナム政府」軍の沖縄基地での訓練（五六・五）、沖縄人軍労働者のベトナム行き命令（六五・六）、B-52爆撃機の嘉手納からの直接出撃（五六・七）、牧港補給基地の新設（五六・一〇）など、六五年から沖縄はベトナム戦争の一大後方基地として機能させられていく。米帝のベトナム介入が強まるなかで、復帰運動内部にベトナム人民との国際連帯を求める部分も生みだされ、自民党をも含む幅広い統一戦線であるがゆえに打ちだしえないできた「軍事基地撤去」などのスローガンがかかけられていつた。

り、とりわけ沖縄の基幹産業である製糖業は六〇年代半ばまでには日本資本が強大な位置を占めるようになる。

これらの政策は「きわめて高圧的な姿勢から経済的手段と日本政府の技術的援助によって復帰運動を緩和するという方向への転換」（「戦後の沖縄の政治と法」宮里政玄）であり、この時代は一般的に「日米琉新時代」と呼ばれている。かかる状況のなかで、五八年沖縄經營者協会がつくられ、五九年には米民政府のテコ入れもあって沖縄自民党が結成されている。ドル切りかえを中心とする経済政策は、皆が一樣に貧困である沖縄社会の内部の階級分解を促進していくものとなつたのである。

ぐものへと結果していった。

これらの鬭争は、ことごとくたたかれた側の勝利におわり、日米帝は沖民が民族的 requirement (復帰) をこころたたかいを成長させていくこと危機感を大きくしたのである。



青年時代のエンゲルス(1820~1895)

科学的社会主义の入門書

マルクス主義の世界的普及に貢献

想闘争に相当の力をさいたのは、前記のようなやむおえない事情のほかに、デューリング批判をつうじてマルクス主義の基本的見解を、このさへも全面的に展開してみようと考えたからである。この試みは成功した。そしてその後、フランスのマルクス主義者、ポール・ラファルグの依頼により、「反デューリング論」の理論的部分をもとにして「空想から科学生へ」が生まれたのである。この本

労働者党にも広がっていた。エンゲルスはマルクスとのあいだに成立していた分業によって、デューリングへの批判作業を引き受け、一八七〇年から「反デューリング論」の執筆をはじめた。

以降、ヨーロッパ革命運動の中心となつたドイツで、当時マルクス主義者に敵対していたイデオローグのうち、もっとも危険視されていた思想家であった。デューリングの思想的影響は、史上最初の大衆的プロレタリア政党といわれるドイツ社会主義

「空想から科学へ」は「オイゲン・デューリング氏の科学の変革」(通称「反デューリング論」)から三つの章を抜粋して編集されたものである。デューリングという人物は、パリコミューン(一八七一年)

前回紹介した「共産党宣言」は、共産主義者同盟（一八四七年～五二年）のために書かれた綱領的文章であった。今回とりあげようとする「空想から科学への社会主義の発展」は、広範な労働者を対象として発行された宣伝用のパンフレットである。しかしいずれもマルクス主義である。

古 典 習 学 ② 空 想 か ら 科 学 へ

② 空想から科学へ

では共通しており、マルクス主義を核心を平易にあらわしたといふ點で、学ぼうとする労働者には必読の書である。エンゲルスによって書かれたこの本をマルクスは「科学的社会主义の入門書」と評価した。

も、私の知るかぎりでは、こんなんたびたび翻訳されたことはないでせう」（エンゲルス）。

これらをうけて三草では唯物史観の基本的命題、資本主義的生産様式が内包する根本的矛盾、プロレタリア革命の不可避性、国家の死滅などが簡潔な表現で生き生きと展開される。百年の時をこえてエンゲルスは

はマルクス主義の普及に大いに貢献した。「ほかのどんな著作でも、八四八年のわれわれの「共産党宣言」

秘密の暴露とは、マルクスのおかげでわれわれに与えられたものである。これらの発見によって社会主義

と剩余価値による資本主義的生産の章をしめくつていう。「唯物史観

理想から、人類史上はじめて科学と
よべるものにした。エンゲルスは一

の客観的・主体的条件を見出すよ
うな社会主義こそが登場せねばならなか
った。そのような意味でマルクスは
・エンゲルスは社会主義をたんなる

会主義を科学にするためにはまずそれを実在的な基盤のうえにすえなければならなかつたのである」。

いくら天才的なひらめきを含んでゐるにせよ、個人の頭のなかでつくりだされた決して実現される保証のない砂上の櫻閣のような、これまでの一切の社会主義にかわって、現実の社会の経済的諸関係のなかに実現

義とは、絶対的真理、理性、正義の表現なのであって、ひとたび発見されさえすれば、それ自身の力で世界を征服できるものなのである「社

れぞれに鋭い分析をくわえつつ、エングルスは次のように結論づけている。「彼らのすべてにとって社会主

一章では三人の有名な空想的社會主義者がとりあげられている。一八世紀から一九世紀にかけて活動したサン・シモン（一七六〇—一八五）、フーリエ（一七七一—一八三七）、オーエン（一七七一—一八五八）である。サン・シモンの思想の特徴は

●空想的社會主義者の限界

デオロギー闘争をつうじて、一八九〇年代にはヨーロッパ労働者階級の位置を確立した。本著もその有力な武器のひとつとなつたのである。

空想的社会主义者の限界

ーリングなど新手の小ブルジョアに対する社会主義とたたかって、マルクス主義科学的社会主義を広め、各国にプロレタリア政党を建設することであった。マルクス主義者たちは空想的

卷之三

ーリングなど新手の小ブルジョア社会主義とたたかって、マルクス主義を教えてくれる。

をおびた今日の被抑圧階級に、それ自身の行動の諸条件と本性とを自覚させることは、プロレタリア運動の理論的表現である科学的社会主义の任務である」。科学的社会主义は「プロレタリアートの「行動」（革命的実践）ともすびついてはじめて科学的社会主义たりうるのである。